

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (94) アッシリアによる北イスラエルの滅亡

アッシリアは長い歴史があります。紀元前20世紀頃からの文献があり、遺跡も残されていますが、現在は消えた文明です。聖書に憎むべき敵として、登場したのは、ティグラト・ピレセル王の時代です。彼の頃に、都は二ネベ(現イラクのモスル付近)に、大帝国を築きあげていたのでした。



人頭有翼牡牛像(アッシリア)

聖書の中にアッシリアという地名が出てくるのは、ノアの3人の息子セム、ハム、ヤフェトが古代文明の地・メソポタミアから、それぞれの方向に分かれて行った時のことです。ヤフェトの子孫は海沿いへ、ハムの子孫はクシュ、エジプト、カナンへ、そしてさらに、**シナルの地からアッシリアに進んでいった(創 10:11)**と記されています。最初にシナルを中心として住み、勇敢な狩人ニムロドという英雄を持ち、大きな町を作る民として記されています。シナルには、**天まで届く塔のある町を建て、有名になろう(創11:4)**との願いでバベルの塔が建てられましたが、それは神のみ心ではなく、民は散らされていきました。

ノアの長男セムの子孫がアブラハムです。東の高原地帯に住んでいたと記されています。

時が流れて、北イスラエルは、権力の奪い合いが続き、国内はまとまりようがなかった頃、次第にアッシリアの侵略をゆるしていくしかなかったのです。北イスラエルの都サマリアの残忍な王メナヘムもアッシリアの圧迫に屈し、属国となりました。

アッシリアの王プル(ティグラト・ピレセル)がその地に攻めて来たとき、メナヘムは銀一千キカルをプルに貢いだ。それは彼の助けを得て自分の国を強化するためであった。メナヘムはアッシリアの王に銀を貢ぐため、イスラエルのすべての有力者に各人銀五十シェケルずつ出させた。アッシリアの王はこの地にとどまらずに引き揚げた。(列下15:19-20)

メナヘム王朝も将軍ペカの謀反によって12年という短命で倒されましたが、アッシリアはさらに圧迫を強めてきました。ペカはアラム(現シリア)の王、レツインと同盟を組んで何とか北イスラエルを持ちこたえさせようと、エルサレムを攻めようとしていました。ユダの王アハズはアッシリアの王ティグラト・ピレセルに使者を遣わして言わせた。「わたしはあなたの僕、あなたの子です。どうか上って来て、わたしに立ち向かうアラムの王とイスラエルの王の手から、わたしを救い出してください。」アハズはまた主の神殿と王宮の宝物庫にある銀と金を取り出し、アッシリアの王に贈り物として送った(列下 16:7-8)

アハズ王の願いを聞き、アッシリアはアラムの都ダマスコに攻め入り、レツインを殺し、アラムを滅ぼしました。イスラエルも同様の目にあいます。イスラエルの王ペカの時代に、アッシリアの王ティグラト・ピレセルが攻めて来て、イヨン、アベル・ベト・マアカ、ヤノア、ケデシュ、ハツォル、ギレアド、ガリラヤ、およびナフタリの全地方を占領し、その住民を捕囚としてアッシリアに連れ去った。(列下15:29)土地は占領され、民は捕囚の憂き目にあいました。アッシリアの政策は民を捕囚として連れ去り、自国の民を入植させるというものでした。ペカもホシユアの謀反により殺されます。ホシユアはアッシリアに貢物を収めますが、エジプトにも使節を送り、アッシリアに抵抗しようとしていました。

アッシリアの王シャルマナサルが攻め上って来たとき、ホシユアは彼に服従して、貢ぎ物を納めた。しかし、アッシリアの王は、ホシユアが謀反を企てて、エジプトの王ソに使節を派遣し、アッシリアの王に年ごとの貢ぎ物を納めなくなったのを知るに至り、彼を捕らえて牢につないだ。アッシリアの王はこの国のすべての地に攻め上って来た。彼はサマリアに攻め上って来て、三年間これを包囲し、ホシユアの治世第九年にサマリアを占領した。彼はイスラエル人を捕らえてアッシリアに連れて行き、ヘラ、ハボル、ゴザン川、メディアの町々に住ませた。… 主はついにその僕であるすべての預言者を通してお告げになっていたとおり、イスラエルを御前から退けられた。イスラエルはその土地からアッシリアに移され、今日に至っている。(列下 17:3-23) 紀元前722年には北イスラエルは滅亡してしまいました。